

2018 第 1 回北海道特別支援学校スポーツ研究成果報告会

期 日 平成 30 年 3 月 17 日(土) 午前 9 時 30 分～午前 12 時

会 場 北海道青少年会館大研修室

参加者 41 名(希望者 43 名 欠席 2 名)

記録者 加藤 由希奈(北海道札幌養護学校)

須藤 育 美(北海道札幌養護学校)

1 北海道稚内養護学校の成果報告

研究テーマ「知的障がい特別支援学校でのフットサル指導の実践と可能性

～稚内養護学校中学部、高等部の実践を通して～

《背景》

- ・実践を通して、どんな指導内容、方法が適切なのか知りたい。
- ・生徒の実態に応じたスポーツの実践として、フットサルの可能性を探求したい。

《研究目的》

- ・教材教具の工夫、開発を含め、生徒に最適な指導方法を見いだすこと。

《実践の様子》

中学部

- ・ボールを手で触る生徒が多かった→みんなで手を繋ぎ、ボールを足で止める、蹴る練習をした。
 - ・体の色々なところでボールを止める。(頭、足裏、胸、膝、お尻、お腹など)
 - ・パス&ゴール(蹴って、走って、止めて、シュート)
- ディスクマーカー(円盤の形の教材)を使用した。
- ・時にはゲーム感覚の遊びを取り入れた。

フットサルゲートボール(コーンとバーのセットに番号が振られていて、1 から順にパスをしていく。)

- ・フットサルボーリング(倒すものが目に見えると分かりやすい。)

高等部

- ・車椅子用ボールキャッチマシン(車椅子の足元に取り付けたバケットでボールを受け取ったり、パスしたりできる。)
- ・インサイドキックの時に足型マークを使う。
- ・キャラクターゲットスロープ
- ・ティーアップ台(ペットボトルで作った台)の活用。
- ・稚内大谷高校サッカー部との交流学习ができた。
- ・スノーシューを活用した雪中フットサル→バランス感覚の強化。

☆道具を寄贈していただいたこと、寄付金があったことがフットサルに取りかかる 1 つのきっかけになった。

《成果》

- ・教員からも、フットサルをやってよかった、生徒たちがこんなにできるんだという達成感を得た声が上がった。
- ・中学部から高等部への継続した指導(保健体育等)は可能だった。

《今後の課題》

- ・人数の確保、実態からの難しさ、組織的な指導の難しさ

2 北海道中札内高等養護学校の成果報告

研究テーマ「高等養護学校のフットサル指導における実践と工夫」

《研究テーマ》

- ・練習メニュー(ウォーミングアップ、1対1、ゲームでの動き)、実践の見直し
- ・十勝、地域におけるフットサルを通しての交流

《実態》

- ・生徒のほとんどが未経験者
- ・週1～3回練習

《実践内容》

- ・少人数、限られた時間だからこそ、より効果的で質の高い練習が求められる。
 - ・ウォーミングアップはカラーマーカーを4色程度使って活動。→足の裏で止める、進むなどの判断が早くなった。
 - ・1対1 ランニング(ボールなし)、1対1 ボールあり、1対1 ボールありでゴールに向かっていく練習を段階的に取り組んだ。
 - ・フリーズゲームからゲームをすることで動き方やポジショニングを理解することができた。
 - ・地域との交流(本校、分校、新得高等支援と合同練習)ができた。
- ☆寄付金のおかげで、新しいユニフォームが購入でき、生徒たちはとても喜んでいたり、とても良かった。

《成果》

- ・合同練習は生徒からまたやりたいという声が多く上がった。
- ・フットサルへの理解や考え方、体の使い方が以前より身につけることができた。
- ・練習の質を見直しできた。
- ・3校で交流できたことで、生徒の刺激になり、モチベーション維持にもつながった。

《課題》

- ・1対1を諦めず、体をぶつける、戦う気持ちを出す。
- ・今後も地域での交流を継続したい。(2月に村の中学校と練習試合ができた。)

3 北海道紋別高等養護学校の成果報告

研究テーマ「外部指導者の活用や指導方法の工夫」

＜テーマ設定の理由＞

- ・小野寺眞悟杯に参加するため、フットサル同好会を立ち上げた。→30名近くの入会希望があった。

- ・生徒の興味関心の高さが伺えた。
- ・地域資源、外部指導者の活用で、地域とのつながりを意識。

<学校の実際>

- ・水産加工業を中心とした地域とのつながりが強い。
- ・若手教員が数多く在籍→チームワークの良い学校。

<指導の記録>

○練習の工夫

- ・ボールネットの活用：ボールが足に当たるという感覚を養うための練習
→生徒らは徐々に蹴り方を工夫するように。（強さや当てる足の位置など）
- ・フリーマンを取り入れたゲーム：ボールの取り合いを減らし、攻撃に繋げる練習
→フリーマンにボールを預けるとい目標ができ、ゴールに近づけるように
- ・ブラジル体操：チームとしての一体感を高めるウォーミングアップ
→大会前には生徒一人ひとりが大きな声をだし、積極的に取り組むように。
- ・ユニフォームを着ての練習：生徒のモチベーションを高めるために、研究費用の一部でユニフォームを購入
→「自分たちは同好会なんだ！」という生徒たちの意識の変化

○「小野寺眞悟杯」での様子

- ・普段できない経験（試合だけでなく、気持ちの経験も）、同年代と試合をすることで、勝敗を意識し、悔し涙を流す生徒も。

<研究の成果>

- ・小野寺眞悟杯に参加することが新聞記事になった。そのことで、学校の代表としてではなく地域の代表として大会に臨んでいるという責任を得ることができた。
- ・大会会場の片付けに携わり、生徒らは多くの人々の支えがあり、競技に参加できることを実感することができた。

<今後の課題>

- ・フットサル同好会は来年度から部活として、本格的に始動する。それに伴い、指導の改善や工夫をしていく。
- ・生徒自身が地域で活躍、交流する楽しさを味わうために、地元大会へ積極的に参加していく。

4 研究協議の概要

<北海道稚内養護学校>

Q 小学部の児童の思いと今後学校として、小学部ともどのように連携していくか。

A 今回の研究では小学部の意識調査は行っていない。

小学部にはサッカーを教えられる専門の指導者がいないことなど課題はあるが、今回の授業を小学部の生徒は見ており、「楽しそう」と感じていた。全学年が取り組めるわけではないが、中学部への移行段階をなる高学年などで、今回の取り組みを生かしていきたいと思っている。

<北海道紋別高等養護学校>

Q 学舎連携についてどう考えているか、紋別高等養護の取り組みも踏まえて。

A 本校は土日、自宅に帰ることを推進している。そのため、地域のサッカー大会に出場する場合は事前に在舎の許可をとっている。今後、練習試合等をしていく時には、生徒たちが在舎している曜日に試合を設定したり、場合によっては現地集合、現地解散等にするなど保護者の協力も必要になってくるかもしれない。いずれにせよ、寄宿舍のある学校では、部活動を進めていくにあたり学舎連携は欠かせない。

<北海道中札内高等養護学校>

Q 前任校（白樺高等養護）と現任校（中札内高等養護）との違い

A 前任校：生徒同士で試合ができる。チーム内で試合回数を増やせるため、チームとしての技術が向上していく。

現任校：部員数が少なく、個別に声を掛けられるため個々の技術の強化につながる。

参加者の意見等

- ・どの学校でも、実態に合わせて工夫し指導していると感じた。普段の生活で脚でボールを触るという動作がないため、指導をスモールステップで繰り返し行うことで少しずつ身につけていくと感じた。そして、フットサルを通して技術だけでなく、地域との繋がりや人間性、一体感など様々なことを学んでいると思った。どの学校の生徒も楽しみながら取り組んでいるのが良かった。これが、目的にもある放課後や休業日、卒業後の余暇活動に繋がっていくと思う。
- ・本校でも昨年12月に球技にフットサルを取り入れました。専門の教員が少なかったということもあり、長らく取り入れてなかったという要因からフットサルどころか、ボールを蹴ったことすらない生徒がほとんどでした。能力差も大きいこともあり、毎回頭を悩ませながら指導を進めました。今回の報告会でうちの生徒ならこれはできる、これなら楽しみながら技術が向上するだろうというものが数多くありました。参考にさせていただきます。
- ・今回の研修を通して、様々な学校の取り組みを知れてよかったです。実際の練習内容や地域との関わりかたなど、具体的で参考になりました。本校は肢体不自由の高等養護学校ですので、生徒の実態、障害によって取り組む方法にも工夫が必要だと思いますが、サッカー、フットサルに興味がある生徒も多いですので、前向きな取り組みができればと思います

